

ドイツ語の語順の変動について

(「広島ドイツ文学」9号, 1995)

吉田 光演

0. はじめに 語順をめぐる基本問題¹

初修外国語としてのドイツ語教育の危機が叫ばれる中で、様々な授業改善の試みがなされている。その多くは、文法よりはコミュニケーションに重点を置いたものであり、それ自体は日本語に偏りすぎた文法訳読教授法を是正する意味で正当である。しかし、日本のドイツ語学習者の大多数は大学生であり、言語習得面での発達は済みであり、子供が母語を獲得する際の無意識的な学習は不可能である。会話の反復から文法規則を学ばせることは不経済で、母語や第一外国語の英語からの類推がマイナスの干渉を与え、中級以上のドイツ語学習を阻害する危険性もある。「コミュニケーション・アプローチか、文法か」という対立から「文法など必要ない」と断言するのではなく、大人の認知能力に即した文法規則を呈示することが必要である。無味乾燥な変化表の列挙ではなく、日本語や英語など他の言語と比較してドイツ語の文法的特徴を明示すればよいのである。文を構成する句の配列規則は、文法の根幹に関わる問題だが、ことドイツ語については英語のSVO, SVOCなどのような基本文型に関する指示は授業でほとんどなされていない。その代わりに呈示される規則は次のようなものである：

- (a) 平叙文や補足疑問文では、定形動詞が2番目に位置し(定形第2位: V/2)、定形以外の動詞は文末に配置され、この2つでいわゆる「枠構造」を形成する。
- (b) 決定疑問文では定形動詞と主語の倒置が起きる(定形第1位: V/1)。
- (c) 副文(従属節)では、定形動詞は文末に配置される(定形後置: V/E)。

こうした規則からは定動詞の位置が重要であることは推測できても、(a)~(c)の文タイプの相互の関連は理解できない。又、主語や目的語、副詞などの文の構成素(文成分)がどのように配列されるのかについては完全なblack boxと化している。「ドイツ語では格が明示されるから語順は自由だ」というような言及が時になされるが、これは間違いである。格が完全に弁別されるのは男性名詞においてのみであり、しかも、ドイツ語は完全な自由語順ではない。確かに、主語、目的語などの配列は英語に比べればはるかに自由度が高い。しかし、例えばワルピリ語では名詞と決定詞がバラバラになる語順は可能だが、ドイツ語では許されない(Hale(1983)):

(1a) Wawirri kapi-rna panti-rni yalumpu
kangaroo AUX spear NONPAST that (=‘I will spear that kangaroo’)

(1b) *Känguruh will ich das spießen.

ドイツ語や日本語は英語のような固定語順とワルピリ語のような自由語順の尺度の中間にあり、両方の性格を分け持っている。そこで次の2点が問題になる：

(d) (日本語や)ドイツ語に、文法的な基本語順があるのかどうか？

(e) (日本語や)ドイツ語の語順の「自由度」は何に由来するのか？

本稿では、上述の教授法からの問題意識を背景に、ドイツ語の基本語順と語順変動の基本問題を論じる。Drach(1937)は、定動詞の位置の変動から前域、中域、後域といった配語域(Stellungsfeld)の概念を導入したが、彼は、外国人にドイツ語を教える際の混乱の要因がラテン語文法の無批判的な応用にあることを見抜いた。² この配語域の概念は今だに有用ではあるが、Drachの仕事から約60年を過ぎようとする現在、我々ドイツ以外のドイツ語研究者も又、この概念をアプリアリに前提するのではなく、これを認知的に説明する道具を用意しなければならない。具体的には以下の論点がある：

(f) ドイツ語の基本語順(基底生成される句の構造的な配列)はいかなるものか？

(g) 動詞の位置(定動詞・定形以外の動詞要素の位置)がいかに導かれるか？

(h) 前域に現れる要素(話題化など)はいかなるものか？

(i) 中域内部の名詞句・前置詞句などの句の「自由語順」はいかに導かれるか？

(j) 後域(枠外配置)に現れるものはどのようなものか？

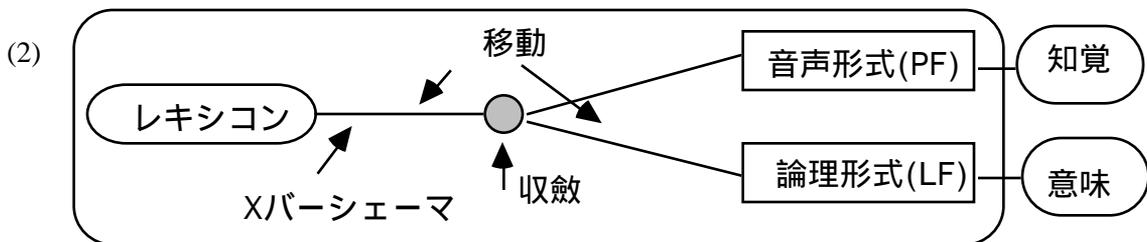
本稿では主に(f)～(i)の問題に焦点を当てて論じることとし、(j)の問題は若干触れる程度にする。理論的な枠組みは、生成文法理論の新しい枠組みである原理とパラメータ理論であるが、ここではできるだけ理論中立的な記述も組み込むことにする。

1. 「原理とパラメータ」理論の枠組み

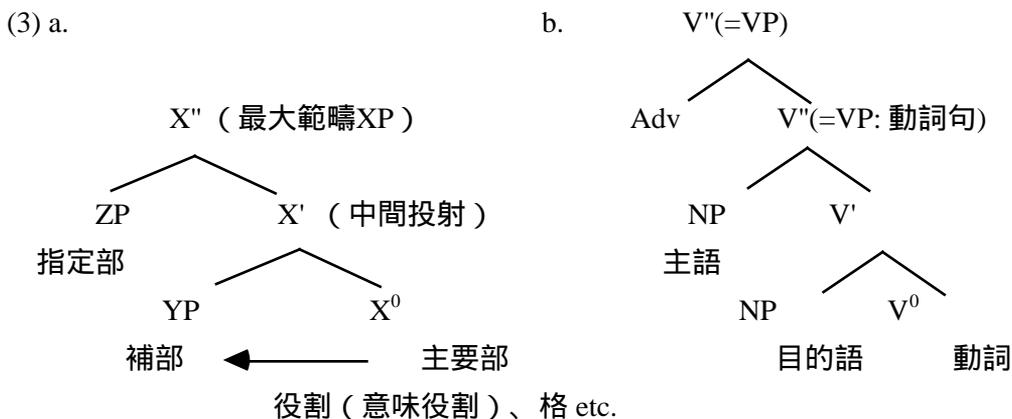
Chomskyが提案した生成文法は、言語という「有限手段から無限の文を生み出す」人間の創造性を解明することが目標であり、その根底には Humboldt 的な言語的普遍への信念がある(Chomsky(1965)では「生成(generate)」はHumboldtの術語"erzeugen"の英訳であると述べている)。生成文法の対象はしかし、長い間英語に限定され、ドイツ語などの語順変動を引き起こす言語では、変形操作は複雑な規則系をなし、人間に固有の文法モデルとなりうる代物ではなかった。受動変形や話題化変形など構文及び個別言語に特有の文法規則を列挙しても、数学的な意味での明示化にはなっても、人間の心の普遍性には及ばない。80年代から始まった生成文法の新バージョンの原理とパラメータ理論に至って始めて、自然言語の多様性と統一性に関する問題が真摯に議論されるようになった。この理論は、知覚や概念体系と同様に、人間の脳内の認知体系の中に「普遍文法(UG)」が生得的に組み込まれいると仮定する。いわばコンピュータ中央演算装置(概念体系)を支えるコプロセッサ(言語知識)である。子供はそ

れ故に短期間の中に不確実な言語データに基づいて、文法を中心部を習得することができるようになる。勿論、各言語の語彙（特に音声・音韻面の辞書内容）は個別に記憶されねばならないが、UGによって可能な文法の集合は限定される。他方、世界に存在する多様な言語の各々は、このUGの諸原理の中に用意された有限の未指定のパラメータの値を設定し、組み合わせることによって出来上がる。すると、ドイツ語という個別言語を形作るUGの中のパラメータ=スイッチとは何かが問題になる。勿論、伝統的・実証的な言語学の世界では、こうした理論中心の研究に根強い疑念もある。しかし、「木を見て森を見ず」、個別言語にとらわれていては見えない個別言語の独自性が、UGという普遍の共通モデルを仮定して始めて、見えてくることも否定できない。事実、ドイツ語の諸々の現象が生成文法の焦点の一つになりつつある。

この原理とパラメータ理論の文法モデルは図(2)のような構成になっている：



文法は言語の音声と意味を取り結ぶ媒介装置であり、(2)では音声形式(PF)と論理形式(LF)が人間の知覚・意味体系との言語的インターフェースをなす。レキシコン部門では、各言語の名詞 N、動詞 V、形容詞 A、前置詞 Pなどの語彙項目の音声、形態的信息と統語範疇、その語彙が下位範疇化する要素などの統語・意味情報が指定されている。レキシコンから取り出した語彙は、次の(3a)のようなXバーシェーマに従って、統語構造の基本単位になる最大範疇=句を構成し、句や文の基本構造を形成する。



主要部には辞書内の語彙が挿入され、主要部が補部の要素を選択して、中間レベルの投射X'を形成し、句を限定・修飾する指定部を伴って、X"=句XPを形成する。主要部は補部と密接な関係にある。例えば、X⁰である動詞は補部の名詞句を統率(=支配)し、補部に意味役割(動作主、被動作主などの役割)や格を与える。補部は基本的

に義務的成分だが、指定部は場合によってはなくてもよい。このXバーシェーマは、句の範疇的性質は全てその中心（主要部）によって規定されるという内心構造を反映している。具体的には、動詞句VPは(3b)の形をとると考えられる（主語も動詞句の中で生成されると仮定する）。副詞のような随意的要素はこのVP句の左か右に付加され、投射レベルは何も変えない。すると、ドイツ語の動詞句の基底構造は、(3b)のように主要部の動詞V⁰が右端（末端）に位置し、英語の場合は左端に生ずるという主要部パラメータを設定することができる：

(4) Ich will meinem Kind ein Buch geben

(5a) [VP (主語) [V' [NP meinem Kind] [[NP ein Buch] [V⁰ geben]]]]

(5b) [VP (主語) [V' [V⁰ give] [a book]] [to my child]]]

(6) 主要部パラメータ（動詞VP、形容詞AP）

ドイツ語の動詞句 VP、形容詞句 APの主要部は句の右端に設定される：

[VP [V' NP(PP) V⁰]] 又は [AP [A' NP(PP) A⁰]]

（日本語のVPの主要部も右端、英語ではVPの主要部は左端に設定される）

不定詞節ではOV語順しか許されないのので、これも(6)の証拠になる：

(7) Ich habe vor, [[NP meinem Kind] [NP ein Buch] zu geben].

もっとも、定形第2位では動詞は補部の左側に来るではないかという反論もあるだろう。Bach(1962)の洞察以来、生成文法の伝統ではドイツ語、オランダ語の基本語順はSOVであると仮定されてきた。なぜなら、動詞後置の配列においては、動詞と補部は線形的に隣接関係を保つが、他の語順では非連続構成要素となり、一体性が喪失されてしまうからである：

(8a) weil Peter gestern nicht [ins Büro ging],...

(8b) Peter ging gestern nicht ins Büro.

動詞後置の(8a)では、動詞 ging(=gehen)とその補部の前置詞句 "ins Büro"は隣接関係にあるが、動詞第2位の(8b)では、副詞gesternと否定辞 nichtによって分断されてしまうので、(8a)のような補部 主要部関係の方が基本的なタイプとみなす方が得策である。又、子供の言語習得過程でも、平叙文でSOVタイプが現れることが観察されている：

(9) ich auch was trinken (cf. Rotweiler(1993) S.39)

子供はまず名詞、動詞などの1語文、次に動詞 目的語のような2語文を獲得する（主語は大抵脱落する）。主語を表し始めると、子供は一定期間SOV、SVOどちらも生成するようになるが、2～3才にかけて、(9)のようなSOV語順を獲得する。従属接続詞が先頭に立たない動詞後置文は、ドイツ語では非文法的であり、大人が発話することもない。しかし、従属接続詞のような語彙は、幼児にとっては意味的にまだアクセスしにくい概念であり、データとして与えられても認知できない。結果的に、子供はパラメータを正しくOV語順に設定するが、過剰生成を行ってしまう。

(6)によって、ドイツ語の動詞は左側に補部をとり、この統率関係の下で、補部であ

る名詞句などに意味役割と格を与える。動詞の格付与は左方向にしかされないので、次のような名詞句と前置詞句の後域への枠外配置の対比も説明できる：

(10a) * Ich muß am Wochenende __ [V schreiben] [NP einen Brief]

(10b) Ich muß __ einen Brief schreiben [PP am Wochenende]

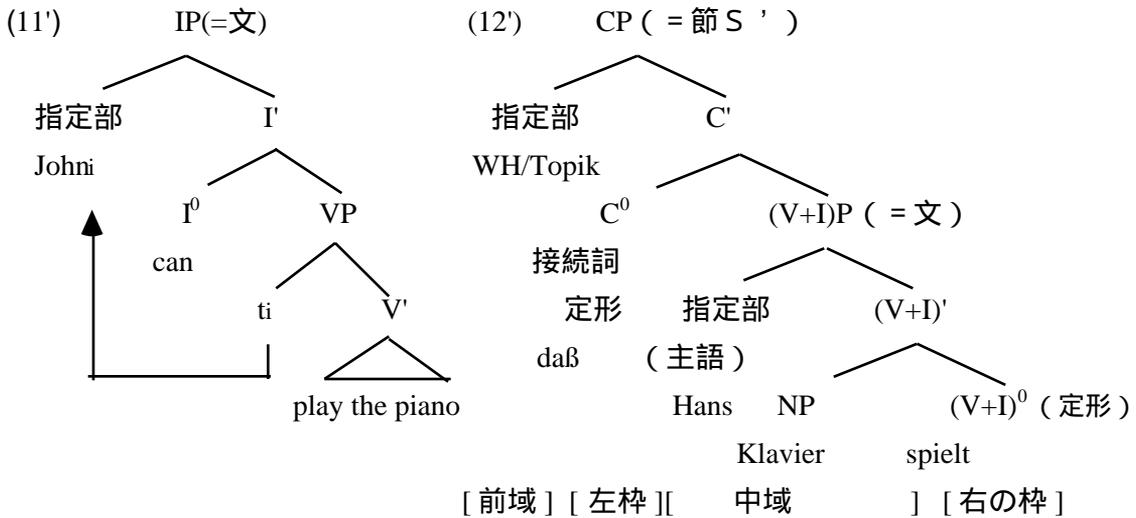
(10c) *私は 週末に __ 書かねばならない [手紙を]

動詞schreibenによって下位範疇化された目的語が動詞の右に移動すると、統率関係が成立せず、この名詞句は格が与えられず、非文法的になる。これはOV言語である日本語でも全く同じで、動詞の右に名詞句を移動することはできない(=10c)。しかし、前置詞句は格を受けとる必要がないので、後域に移動してもよい(=10b)。

名詞、動詞、形容詞、前置詞、副詞のような実質的・概念的な意味を持つ語彙範疇は、どの言語でも(3a)のようなXバー式型に基づいて生成される。概念システムを活性化した子供がまず獲得するのは、命題の核心をなす<主語 述部>部分である。その上位に位置するのは、時制やモダリティである。更に、英語やドイツ語のように、主語と定形動詞との間に人称・数の一致関係がある言語では、時制と一致素性を含む屈折辞 I (inflection) という意味内容の乏しい「機能範疇」があり、これは動詞句VPの上であって、Xバー式型に従いIP(=S=文)という範疇を構成する。ドイツ語の基底語順は副文のSOVとすれば、次の英語とドイツ語の文は(11'),(12')のような構造になる：

(11) John can play the piano.

(12) ... daß Hans Klavier spielt



屈折辞 I⁰ は時制素性[±T]と一致(人称)素性[Agf]を含む抽象的な素性の束である。主語と定動詞の一致は、屈折の主要部 I⁰ とその指定部との1対1の一致関係として把握される。I⁰ が[-T]の時は不定詞句となり、I⁰ は主格を与えられない(主語は目に見えない形で現れない)。I⁰ が[+T]の時は([+T]は更に、現在/過去と指定され)、[Agf]の内容(例えば3人称・単数)と主語の名詞句の人称素性が一致する必要がある。動詞句VP内の主語は、従って(11')のように、主格を得るためにI⁰ の指定部に移動する。定

動詞はレキシコンで動詞Vと屈折変化I⁰が形態的に完成した形で統語部門に入る。英語の屈折辞I⁰はVPの左にあり、ここには助動詞が現れる。普通動詞の場合は、動詞の屈折変化はレキシコンで形成され、VP内部の主要部V位置に留まる（I⁰は空のまま）。英語では、I⁰位置は表層統語構造で活性化される必要はないからである：

(13) [IP John_i [I' [I⁰ ___] [VP often [VP t_i [V goes] to the movies]]]] (I⁰は音声的に空)

ドイツ語では、定形要素I⁰は左側にある動詞句VPを補部にとり、I⁰の指定部に対して、主格を付与する。ただし、ドイツ語のようなOV言語では[[VP V⁰]I⁰] というように動詞と屈折辞は隣接しあっており、他の要素が介在することはないので、範疇そのものが(V+I)と融合した形だと考える。この過程はドイツ語では形態的に透明である：³

(14a) Ich [lerne] jetzt Englisch. ("lern"(V) + "φ"(T(現在)) + "e"(Agr(1人称単数)))

(14b) Wir [lernten] früher Chinesisch. ("lern"(V) + "te"(T(過去)) + "n"(Agr(1人称複数)))

ちなみに、日本語でもV+Iは融合しているが、[Agr]素性は存在しない：

(14c) 私は(我々は)中国語を学んだ。 ("manab"(V) + "ta"(T(過去)))

更に文IPや(V+I)Pの上には節を導く補文標識C⁰があり、従属節属詞などが位置する。Cの指定部には疑問詞・話題が現れる。枠構造と比較すれば、ドイツ語の前域はCの指定部に、左の枠は補文標識Cに、右の枠は定形要素V+Iに対応することが分かる。こうした構造は抽象化されてはいるが、英語、ドイツ語、日本語といった異なる言語でも共通した構造フォーマットが仮定できる利点がある。

Xバー式型で生成された基底構造に、任意の を移動する 移動が加わって文ができあがる。この表層構造は音声的にも意味的にも完全に解釈可能になり、収斂した段階でLFと、PFに受け渡される。LFは概念体系とのインターフェースをなすので、言語間の違いはない。故に個別言語のパラメータは、レキシコンとPFに限定される。

2. 定形移動

(12)の節の構造から、次の定形要素の主要部パラメータも設定できる：

(15) ドイツ語では、文の主要部の屈折(定形)要素I⁰は右端にある。

英語ではI⁰はVPの左にあり、SVO語順になる。前章の議論から、ドイツ語の基本語順はSOVであることが分かった。勿論、(6),(15)からだけでは、定形後置しか生成できないので、定形1位、2位を導く規則が必要になる。定形配置は従来も詳しく記述されているが、枠構造がなぜ存在するのか、という説明はない。実際、定形位置は、主文・副文といった区分とも、主張、質問等の語用論的機能とも1対1に対応しない：

(16) Peter sagt, Fritz [habe] gestern zuviel Bier getrunken. (V/2, 副文)

(17) Ob Fritz gestern zu viel Bier getrunken [hat]? (V/E, 主文・疑問)

(18) [Hätte] ich das gewußt! (V/1, 主文・感嘆)

V/2=主文という訳でも(=16)、V/E=副文という訳でもなく(=17)、V/1=質問も必ずしも

成立しない(=18)。表層語順にとらわれたタイポロジーでは、ドイツ語はSVOでもあり、SOVでもあるということになってしまう。ドイツ語ではなぜ従属接続詞があるとV/2配置が非文になるのかという問いは、機能的には答えられない。従属接続詞があればV/2は起こらず、V/2では従属接続詞がないという相補分布の関係は深い抽象レベルで統語的に説明されなくてはならない。daß, ob, weilのような補文標識と定動詞の間には、時制がなければ生起できないという共通性がある。つまり、daßなどが生ずるC位置で、必ず時制の値が指定されなければならないと仮定すれば、C位置に接続詞がなければ、時制を伴う定形動詞V+Iが必然的にC位置に繰り上がることになる：

(19a) [C [+T] daß] die Vorlesung um 10 Uhr [V+I an- [V+I fängt] [+T]]

(19b) *[C ___] die Vorlesung um 10 Uhr [V+I an- [V+I fängt] [+T]]

(19a)では"daß"があることによりCは[+T]となるが、Cが空だと時制がマークされない。

(19c) [C [+T] [V+I fängt]] die Vorlesung um 10 Uhr [V+I an- t] (t: 移動の痕跡)

移動

非文(19b)を救う方法は、[+T]素性をもつ定形動詞をC位置に代入することである。この結果できた(19c)は、V/I=定形第1位の構造である。仮定文の前提の"wenn"省略時のV/Iも全く同じ原理から派生する：

(20) [C [+T] [V+I wäre_i]] das Wetter heute schön [t_i] ("wenn das Wetter heute schön wäre")

このように、移動は典型的には「移動しなければ文の派生が破綻する」ことを救う最後の手段として用いられる。定形第2位は、この構造に更に話題化操作で、中域内部の任意の句をCPの指定部=前域に移動して得られる：

(21a) [CPSpec [NP die Vorlesung]] [C fängt] t um 10 Uhr [V+I an- t]

(21b) [CPSpec [NP um 10 Uhr]] [C fängt] die Vorlesung t [V+I an- t]

主語以外の句が先頭に立つ場合に、主語 定動詞の倒置が生じている訳ではない。むしろ、(21b)のような文を主語 動詞の倒置と見るのは、英語の語順からの干渉である：

(21b') [NP um 10 Uhr]_i [IP [NP die Vorlesung] [V fängt] t_i [an]]

(倒置?)

ドイツ語で(11')の英語の構造を仮定した話者にとっては、主語以外の句は話題化によって前置される。英語では話題化でも動詞位置は変化しないので、V/2を導くには主語動詞の位置の入れ替えが必要になる。しかし、これは誤った分析である。動詞第2位は英語を除くゲルマン諸語の本質的なものであり、主語や目的語などの文法範疇とは関係ない。定動詞が補文標識Cに移動した後、(21a)では主語が、(21b)では前置詞句がCの前のCP指定部に移動する。V/2現象はこれによって適切に説明された。定形後置節では基本語順が維持され、分離動詞の前綴りと基礎動詞部分は融合しているが、(19c),(21)では非連続構成要素になる。このように枠構造は、SOV語順に平叙文、疑問文での定形動詞の前置が作用することによって表層的に作り出された構造である。

以上の議論は次のようにまとめられるだろう：

(22)ドイツ語の基本語順は、(日本語と同じ)SOVである(V/E)。

(23)従属接続詞位置Cが空なら、時制形を持つ定形動詞がC位置に移動する(V/1)。

(24)定形動詞が前に移動すれば、任意の句を先頭に移動(話題化)できる(V/2)。

従って、ドイツ語の3つの文タイプは単一のSOV構造から派生することができる。又、日本人には学習が好都合になる。ドイツ語は英語とは違って、日本語と同じSOVであり、日本人が注意しなければならないのは、ドイツ語に特有の定動詞移動である。

3. 前域配置の問題

2章で、前域はV/1構造の文内部から句を移動することによって作り出されることを見た。移動の原則は、移動元(痕跡)が、(動詞などの語彙によって)適切に認知されるか、移動先(先行詞)によって統率されることである。話題化も移動の一つだが、これは例えば、次のような移動関係を表す:

(25a) [CP __ [C' [C habe_i] [(V+I) "ich noch nicht dieses Buch gelesen t_i]]]

(25b) [CP dieses Buch_j [C' [C habe_i] [(V+I) "ich noch nicht t_j gelesen t_i]]]

_____ | 句の移動

"dieses Buch"は動詞"lesen"の目的語位置に生成され、(25b)でCの指定部(意味役割のない位置)に代入される。移動先から見ると、名詞句"dieses Buch"が上位の位置から痕跡を束縛する。これによって意味的には演算子変項の連鎖ができあがる。上位の位置から下に繰り下げられると、移動先は痕跡を束縛できず、非文法的になる:

(26)* [CP1 Ich frage __ danach, [CP2 wann ihn sein Vater zurückkomme]].

_____ (繰り下げ)

更に、移動先と移動元の距離は遠すぎてはならない。通常は、節境界(CP)を一つ一挙に飛び越えるような話題化による移動は許されない:

(27)* [CP1 [Dieses Buch] weiß ich nicht, [CP2 wann ich __ gelesen habe]].

_____*

要するに、移動間隔が大きすぎると、移動先と移動元の関係が認識しえないのである。

この前域の位置には、2つ以上の構成素が現れることはできない:

(28a) [V' Ein Eis spendiert] hat der alte Mann dem Kind.

(28b)*[Der alte Mann spendiert] hat dem Kind ein Eis. (Dürscheid(1989))

<対格目的語 動詞>は前域に現れうるが(28a)、<(動作主の)主格主語 動詞>は前域を占めることができない(28b)。主語は動詞句内に生成されるが、動詞と直接姉妹を構成するのは目的語補部であり、この2つでV'節点を形成し、従来の意味の動詞句VPの構成素をなす。従って、主語と動詞は一つの構成素となりえないのである。

さて、前域=話題の移動という分析に問題点がない訳ではない。前域の要素が主語かどうかで、文法的なふるまいが変化するためである:

(29a) [Es (=das Auto)] ist schon wieder kaputt. (主語の"es")

(29b) *[Es (=das Auto) muß ich selber reparieren. (目的語の"es")

代名詞"es"は、主語でも目的語でもアクセントを持ってない。しかし、主語であれば前域に生起できるが、目的語の場合は許されない。つまり、主語が前域を占める場合はアクセントは不要だが、主語以外の句では対比アクセントが必要である。この事実は、2通りの前域移動の区別が必要だということを示唆している。そこで、前章の分析を修正し、主語は、中域内部の(V+I)Pの指定部位置で主格を受け取ることもできるが、定動詞が第2位(C位置)に移動すれば、その指定部(=前域)で主格を受け取ることもできると考えよう。そうすると、(29a)は主格を得るための移動になる：

(29a) [CP [es_j] <-主格 [C[V+I ist_i] [(V+I)P t_j schon wieder kaputt t_i]]].

主語以外の句が移動する時は、話題としてマークされ、音声的には対照アクセントを持ち、意味的には変項を束縛する話題の演算子として解釈される。結論すると：

(30) 定動詞移動の後に、前域に一つの句が移動する。主語が移動する場合は、前域で主格を受け取り、主語以外の句では話題として解釈される要素に限られる。

4. 中域内部の語順

中域内部では、補足語の語順などはかなりの程度自由に換えられる：

(31a) weil Peter gestern [dem Kind] [das Bilderbuch] schenkte,...

(31b) weil Peter gestern [das Bilderbuch] [dem Kind] schenkte,...

(32) weil [den Hans] schließlich [jeder] kennt,...

Engel(1982)はValenz文法の枠組みで中域内の文成分の語順を次のようにまとめている：

(33) 中域における基本語順の全体像



(E:補足語 DA:与格 SU:主語 SO:その他 AK:対格 A:添加語 ä: 発言関連 s:文関連 v:動詞関連)

この基本語順よりも右に現われる要素は強め(レーマ)の解釈を受けるとされる。

(33)の記述はかなりの場合に当てはまるが、例外も挙げられる：

(34a) weil der Oma das Laufen schwerfiel (DA(定) SU(定))

(34b)^M weil das Laufen der Oma schwerfiel (SU(定) DA(定)) (m:有標)

(33)では主語が前にある(34b)が基本語順のはずだが、"schwerfallen"のような動詞では、逆に(24a)のように、与格<主格主語が無標の語順である。更に、次の例を見よう：

(35a) Sie haben den Verbrecher der Polizei ausgeliefert. (Akk - Dat)

(35b)^M Sie haben der Polizei den Verbrecher ausgeliefert. (Dat - Akk)

ある特定の動詞では対格<与格が無標の語順になる。これは何故だろうか？

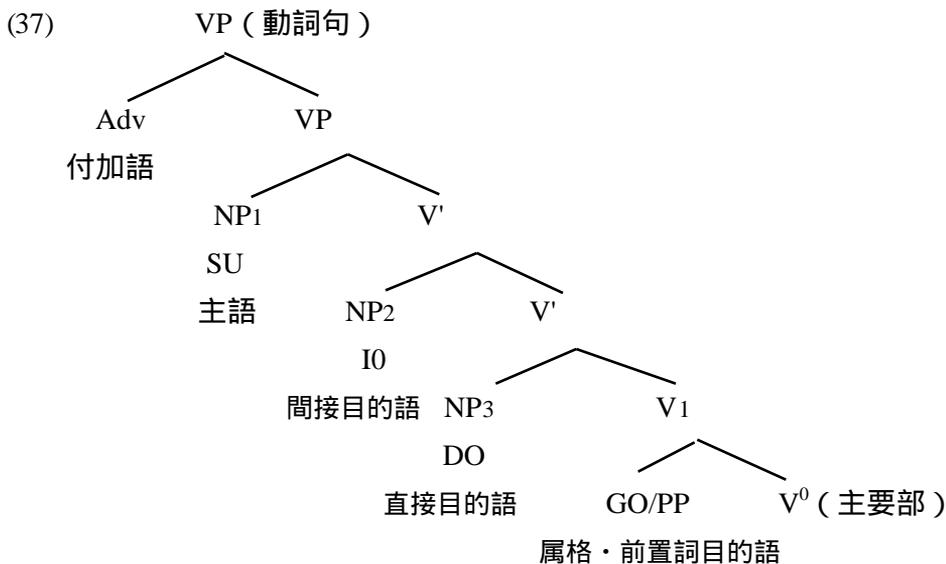
(33)のように語の線状的な配列だけを見ては、これらの問題は解決できない。我々

の観点から中域語順決定の要因をもう一度考えよう。ドイツ語は完全な自由語順ではなく、ノーマルな語順と特異な語順が比較的是っきり区別できる：

(36a) daß Maria [einen Brief] [an ihren Vater] geschrieben hat,...

(36b)* daß Maria [an ihren Vater] [einen Brief] geschrieben hat,...

対格目的語は中域内で位置が変えられるが、動詞に統率された前置詞格目的語を前方に移動するのは困難である。動詞の格に関しては、動詞が与える固有格としての与格、属格などは個別に辞書で指定されるが、対格は他動詞の主題(Thema)と結合するので、構造的な格であり、統率関係の下で X内の補部に付与される。この前提に立って、動詞句VPの構造を詳しく分析すると、(37)のようになる(Rosengren(1993))：



V⁰は動詞がもつ主題役割に基づいて、間接・直接目的語などの補足語を補部にとり、V'を形成し、VP句に投射する。動詞の項は(37)の順序で統語構造中に生成される：

(38a) Gestern hat Peter seiner Freundin IO das Buch DO geschenkt.

(38b) Gestern hat Peter das Buch DO seiner Freundin IO geschenkt.

(39) schenken: [Agens(SU) Rezipient(IO) Thema(DO)]

動詞schenkenが付与する主題役割と順序が(39)の辞書項目の通りだとすると、(38a)は基本語順のままである。(38b)は基本語順からずれており、非文ではないが、有標の語順になる：(38a)は "Was schenkte Peter seiner Freundin?","Wem schenkte Peter das Buch?"の疑問の答になるが、(38b)は前者の疑問(was...?)の文脈では不自然である。この観察からも、補足語の順序に関して基本語順が存在することが分かる。しかし、基本語順を認めても、(37)の構造は必要なく、基本語順の他には「既知要素は左、新情報は右」という語用論的原理で十分だという機能主義的な立場もある。確かに、語順変化からテーマ・レーマのような情報構造が読み取れるが、語順変動が全て機能主義に還元されると考えるのは誤りであり、語順の記述では、構造的・機能的アプローチの両方が

必要である。次の例では前置詞格目的語、属格目的語が直接目的語よりも右、即ち動詞に近い位置に現われるが、これらは語順の置き換えは不可能である(40b, 41b) :

(40a) Peter hat [VP das Buch(DO) [V1 auf den Tisch gelegt]].

(40b) *??Peter hat auf den Tisch das Buch gelegt.

(41a) Die Frau hat [VP einen Angestellten [V1 des Diebstahls bezichtigt]].

(41b) *??Die Frau hat des Diebstahls einen Angestellten bezichtigt.

特定の動詞がとる前置詞目的語 (PO)、属格目的語(GO)は動詞との結合度が高いので、(37)ではV⁰の直接姉妹として生成され、中間投射V₁を作る。V₁は 移動のような統語操作を受けつけない領域なので、語順の入れ替えができない。もし、「新情報は右」という語用論の原則が全てなら、(40b)が文法的になる文脈もあるはずだが、それでも容認できないのはこうした統語的な理由による。ここまでの議論を整理しよう :

(42) 補足語 (項) の基本的な配列 動詞の主題役割付与の基本パターン :

[VP	主語	間接目的語	直接目的語	前置詞 / 属格目的語]
	主格	与格	対格	PP 属格

(43) 動詞の固有の語彙特性に基づく主題役割の配列 (レキシコン) : (42)のデフォルト配列からはずれた主題役割配置を持つものは辞書内部で個別に指定される。

(43)に属する動詞の中でも、ある種の類似性は見られる :

(44) gefallen, gehören, passieren ... [与格目的語 (経験者) < 主格主語 (主題)]

主格主語が、動作主ではなくむしろ目的語 (被動作主) として認知でき、与格目的語が経験者を表す時、与格 < 主格の順になる場合が多い。これはいわゆる能格動詞のクラスに近いものである。これらもデフォルト配列とは異なるが、レキシコンで一つのクラスを形成する可能性が高い。

では、中域内部の語順変動 (生成文法ではこれをかきませ (scrambling) と呼ぶ) をどう記述すべきだろうか ? これは基底構造から句の随意的な移動を通じて表層的に派生したものと考えられている。⁴ 移動は構造的に下から上への移動だから、ドイツ語では右から左への句の移動になり、又、中域内の句の移動は義務的ではなく随意的なので、話題化のような空の位置への代入ではなく、ある句への付加の操作だと考える。

勿論、中域で左に付加移動できる要素にも様々の制約がある :

(45) weil [NP den Hans] jeder Student (___) kennt,..

(46) weil [PP über Politik] keiner etwas (___) sagen wollte,..

(47) *weil [VP das Brot essen] Hans nicht (___) wollte,..

(48) *weil [AP teuer] dieses Auto (___) ist,..

名詞句や前置詞句は左に移動できるが(45,46)、動詞句や形容詞句などは移動できない(47, 48)。おそらく個物を指すような項 (Argument) である名詞句や前置詞句だけが移動できるのであって、これは次のような統語的な制約で表せる :

(49) 中域で、ある句ZPの中から、句XPを左側に移動 (= 付加) してよいのは、

く、副詞句などが基底構造で (V+I)' の右に付加部として生成されたものであるう：

(67) weil sie [(V+I)' [(V+I)' mehr gearbeitet hat] [PP als du]] ...

5. まとめ

以上、ドイツ語の語順（変動）に関わる基本的な問題を考察した。語順の分析には、次の(68)のレベルの考慮が必要になる。語順の統語論的な分析では、原理とパラメータのアプローチはきわめて有効な理論であり、語順変化の点で類似した現象をもつ日本語との対照研究にも活かすことができる。勿論、抽象度の高いこの理論をドイツ語教育に活用するには工夫が必要だろう。

(68) (i) 動詞（述語）の語彙的特性（補足語の順序関係） レキシコン

(ii) 基本語順の形成（SOV 語順）

(iii) 定動詞移動・前域移動

(iii) 具体的な文タイプの派生

(v) 随意的な移動（かきませ）

統語論

(iv) 実際の文の語順

意味論

語用論（情報伝達原理）

注

- 1 本稿は、日本独文学会1993年秋季研究発表会（富山大学10月5日）でのシンポジウム（「文法記述・辞書記述の諸問題」）で筆者が行った発表（「語順規則の記述と説明をめぐって」）を修正したものである。共同発表者ならびに討論に参加された諸氏に感謝したい。このシンポジウムは、93年春の独文学会で行われた「ドイツ語研究にはどのような未来があるのか」というコロキウムの問題意識をひきついで行われた。折しも、日本のドイツ語教育の地位の低下と（学会での語学の発表の少なさからも分かるように）ドイツ語研究の低迷の中で、このコロキウムは補足疑問文ではなく、「ドイツ語研究に未来があるのか」という決定疑問文として解釈された。確かに、我々は真剣に日本におけるドイツ語研究の方向を検討すべきである。ドイツにおけるドイツ語研究の後追いで済まされる時代ではないのだから。
- 2 Drachは Vorfeld, Mitte(定形位置), Nachfeld(現在の中域)といった区別を立てていた。
- 3 英語では [IP John_i [I' [I must] [VP often [VP t_i [V' [V visit] his aunt]]]] のように、IとVは副詞によって分断されうるので、IとVは別々の範疇を形成する。ドイツ語ではVとIがマージすると考えると、節を補部にとる動詞が例外的に節を右側に支配することが説明できる（節CPIは格付与を受けない）：

weil ich [(V+I)' [V+I dachte] [CP daß Peter heute nicht kommt]]

- 4 かきませ (随意的な語順変動) の分析は、最近の生成文法でも諸説分かれている。受動文における主語の上昇と同様に、項の位置への名詞句移動とする分析や、基底構造で自由語順が生成されるという分析もある。Grewendorf & Sternefeld(1990), Haftka(1994), Cover & Riemsdijk(1994)の中の諸論文を参照されたい。

参考文献

- Bach, E.(1962): The order of elements in a transformational grammar of German. *Language* 38, 263-269.
- Chomsky, N.(1965): *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge, Mass.
- Chomsky, N.(1981): *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht.
- Chomsky, N.(1986): *Barriers*. Cambridge, Mass.
- Chomsky, N.(1991): Some Notes on Economy of Derivation and Representation. In: R. Freidin(ed): *Principles and Parameters in Comparative Grammar*. Cambridge, Mass, 417-454.
- Chomsky, N.(1992): *A Minimalist Program for Linguistic Theory*. MS.
- Cover, N. & H. v. Riemsdijk (Hrsg.)(1994): *Studies on Scrambling*. Berlin et al.
- Drach, E.(1937): *Grundgedanken der deutschen Satzlehre*. Darmstadt.
- Dürscheid, C.(1989): *Zur Vorfeldebsetzung in deutschen Verbzweit-Strukturen*. Trier.
- Engel, U.(1982²): *Syntax der deutschen Gegenwartssprache*. Berlin.
- Grewendorf, G.& Sternefeld, W.(eds.)(1990): *Scrambling and Barriers*. Amsterdam.
- Haftka, B.(Hg.)(1994): *Was determiniert Wortstellungsvariation?* Opladen.
- Haider, H.(1993): *Deutsche Syntax - generativ*. Tübingen.
- Hale, K.(1983): Warlpiri and the grammar of non-configurational languages. *Natural Language and Linguistic Theory* 1, 5-47.
- Heidolph, K. et al.(1981): *Grundzüge einer deutschen Grammatik*. Berlin.
- 井口/成田/吉田(1994): ドイツ語研究と言語研究をめぐって. 阪神ドイツ語学研究会会誌 6. 78-98.
- Lenerz, J.(1977): *Zur Abfolge nominaler Satzglieder im Deutschen*. Tübingen.
- Reis, M.(Hg.)(1993): *Wortstellung und Informationsstruktur*. Tübingen.
- Rosengren, I.(1993): Wahlfreiheit mit Konsequenzen - Scrambling, Topikalisierung und FHG im Dienste der Informationsstrukturierung. In: Reis(Hg.), 251-312.
- Rotweiler, M.(1993): *Der Erwerb von Nebensätzen im Deutschen*. Tübingen.
- Stechow, A./Sternefeld, W.(1988): *Bausteine syntaktischen Wissens*. Opladen.
- Thiersch, C.(1978): *Topics in German Syntax*. MIT-Dissertation.
- Webelhuth, G.(1989): *Syntactic Saturation Phenomena and the Modern Germanic Languages*. Dissertation, University of Massachusetts.
- 吉田(1990): ドイツ語のかきませについて GB理論の立場から. *Southern Review*5, 61-73.
- 吉田(1992): 動詞第2位と補文標識に関する一考察. *Ryudai Review of Language & Literature* 37, 169-193.

Zur Wortstellungsvariation im Deutschen

Mitsunobu Yoshida

In dieser Arbeit untersuche ich im Rahmen der Rektions- und Bindungs-Theorie die Wortstellungsvariation des Deutschen. Weil das Deutsche in bezug auf die Umstellungs-möglichkeit zwischen Sprachen 'freier' und 'striker' Wortstellung steht, ist die Erfassung seiner topologischen Eigenschaften schwierig, jedoch sowohl linguistisch als auch didaktisch sehr wichtig. Die Grundwortstellung des Deutschen ist SOV-Abfolge, in der Komplemente direkt vor dem Verb stehen. Flexionsmerkmale(=I) regieren die linksstehende Verbalphrase(VP). Aber die Kategorie I bildet im Gegensatz zum Englischen keine eigene Projektion. V und I verschmelzen somit im finiten Verb:

(1) [CP ___ [C' [C⁰ daß] [(V+I)P Hans [(V+I)' [NP Klavier] [(V+I)⁰ spielt]]]]]

Auch das Japanische verhält sich in dieser Hinsicht ähnlich. Deutsch lernende Japaner sollen jedoch besonders auf die Verbbewegung im Deutschen achten, die das Japanische nicht kennt: Verb-Erste und -Zweite Sätze werden aus dem SOV-Satz hergeleitet. Wenn der Complementierer(=C)-Position nicht besetzt ist, geht das finite Verb in die C-Position(=V/1). Steht das finite Verb in C, kann eine Phrase weiter nach vorne in die Spezifikatorposition von C(V/2) gehen. Dabei unterscheiden sich zweierlei Vorfeldbesetzungen: Wenn das Subjekt im Vorfeld auftritt, geht es um die Nominativzuweisung. Dagegen stellt die Bewegung eines Nicht-Subjekts (Objekt oder Adverb) ins Vorfeld eine Topikalisierung dar. Relativ freie Abfolge im Mittelfeld entsteht durch die optionale Adjunktion von Argumenten (NPs oder PPs) an eine verbale Kategorie (VP oder (V+I)P), wobei die Umstellung die pragmatische Informations-gliederung ("Thema vor Rhema") befolgen muß. Die einzelsprachliche Umstellungsmöglichkeit ist von der Rektionsrichtung abhängig: In SOV-Sprachen wie Deutsch oder Japanisch stimmt die Bewegung nach links mit der Rektionsrichtung des Verbs überein, während dies in SVO-Sprachen nicht der Fall ist.